

WAYプロジェクト(校内道徳教育推進委員会)レポート・12

2019・12/12(木)

今回は葛小中の松田先生、運営協議会会長の仲川さん、PTA会長の石口さんにもご参加いただき、10名で道徳科の内容項目「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」について議論が繰り広げられました。

C17「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」

優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること。

そもそも「国」とは、どのような概念規定ができるのか・・・社会科では、「領土」「国土」などの言葉で表されているが、生物学的な特徴で分けられている「人種」と生活スタイルや文化などで分けられている「民族」というくくりで規定されることがある。日本では、その人種や民族と国家が重なって捉えられているところがあるのではないかと意見が出された。

では、「日本国」と言ったときのイメージは、どのようなものだろうか。頭で具体的に思い描くものにはどのようなものがあるだろうか。

「信心深い人」「やおよろずの神」「神社参拝」「日本国憲法をもとにした平和国家」「天皇制」「素朴な感じ」「ひらがな・カタカナ」「閉鎖的なイメージ」など、参加者から様々な意見が出された。中には「みそ汁・ごはん・焼き魚」という声もあった。それらのイメージは、本当に事実と言えるのか、どうしてそのようなイメージを持つようになったのか。例えば、神の国ですなどという情報に事あるごとにさらされていると、そのようなイメージを何となくもつに至ってしまうのではないだろうか。すなわち、すべては、私たちの目にうつつしているだけのもの、耳に入ってくるだけのものにより、なんとなく共通に見ていたものがそこにあり、日本的心の性格のようなものができあがっていったのではないかと意見も出された。

日本の原風景を思い浮かべたとき、山の色や花々、四季折々の景色など、とてもやわらかでそれでいて素朴な感じがある。日本という国に住む人の特徴として、人に対して丁寧な接し方をしたり、言語の中に敬語を入れたりす

る。一方で、すぐ周りからの影響を受けやすい日本の国民性のようなものも感じる。だからこそ、目の前にあるもの（物質的なものだけでなく）が一体何なのかをじっくり考え、問うていく対話が日本人には必要ではないだろうか。

国を大事にしていくとは、人から強制されるものではなく、日々の願いや、生まれ育ったところを大事にしようといったところから始まるのではないだろうか。もっと「まったり」した、人間の素朴な感じからわき出てくるようなものを想像する。



いくつかの意見しか取り上げていないが、白熱した意見交流がなされたように思います。国をイメージしたとき、その時その時の統治機構に属する為政者が強制的につくったというのではなく、もともと人々の気持ちの中にあるもの、古くから長い歴史の中で培われてきたものというようなイメージを私は想像しました。「国を愛する」という言葉の「国」を、「ふるさと」に置き換えて、もう一度考えてみたいと思いました。

☆ 次回のWAYプロジェクトは、12月19日（木）19時から21時です。みなさんのご参加をお待ちしております。

（文責：泉）